

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 十 一 卷 第 六 號

論 說

地租と地方團體との關係……………法學博士 神戸 正雄

植民地の財政政策に就きて(三)……………法學博士 山本美越乃

地代課税主義土地改良論者……………法學博士 河田 嗣郎

生計調査を論ず……………法學士 汐見 三郎

價值論上のリカアドミマルクス(三完)……………經濟學士 堀 經夫

時事問題

目下の卸賣相場と小賣相場……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

英國現代の經濟學者と社會主義……………經濟學士 三田村 一郎

經濟地理學研究に對するグルーベル博士の見解……………經濟學士 黒 正 巖

竹越氏の「日本經濟史」に就て……………法學士 本庄榮治郎

石澤氏の「本邦銀行發達史」を読む……………法學士 大森 研造

附錄……………本誌第十一卷總目錄……………

新著紹介

石澤久五郎氏著 本邦銀行發達史

大森 研 造

本書は著者が曩に東京銀行通信錄に連載したものを補正蒐錄したのであつて、明治の初年から歐洲大戰勃發前まで略五十年間に於ける我國銀行制度の發達と、併せてそれと密接の關係を有する産業の發展を叙説して居る、隨つて本書は一面に於て明治産業發達史とも稱し得べきものである。

今其の内容を見るに、第一篇は銀行發達の第一期即ち國立銀行制度の移殖及びその隆盛時代であつて、先づ筆を爲替會社に起し、明治初年の銀行業が普通銀行として發達すべき運命を持

ちながら不換紙幣整理のために米國の國立銀行制度が移殖せらるゝに至つた事情を解説し。

第二篇に於ては、第二期即ち政府紙幣及び銀行紙幣を銷却整理して強固なる兌換制度が確立した時代の有様を縷述して居る、即ち此の時代から政府は國立銀行に對する從來の銀行政策を一變した、換言すれば中樞機關として日本銀行が創設せられ、之に紙幣發行の特權を與へて金融調節の任に當らしめた結果、從來個別的に紙幣發行の特權を有してゐた百五十有餘の國立銀行は、或は廢行の已むなきに至り、或は營業期間満了と共に普通銀行に組織を改めるに至つたのである。かくして從來流通して居た銀行紙幣の整理は著々その歩武を進めたが、その間に、普通銀行は國立銀行に代り、雌伏狀態から脱出して金融機關の重要な主力として發達したのである。第三篇は、第三期即ち金本位制度と銀行制度の革新及びその擴張の時代であつて、國立銀行が整理完成と共に幣制上金本位制が採用せられ、又内國産業の發達を速かならしめるために多くの特殊金融機關が設置せられた、然し此時代に於ける普通銀行は、猶ほ未だ對内的發展に止まつたのである。第四篇は即ち銀行制度の整頓及び資力充實の時代であつて、前期に於て殆んど整備した各種の銀行が各其資力を充實し、その業務を擴張したと同時に、各種産業に對接

を與へながら又その産業の發展と提携前後して著大の發達を見るに至つたのである。即ち日本銀行は中央銀行として益々其の本領を發揮し、普通銀行も亦驚くべき長足の進歩をなしてその領域に活躍することとなり、次に不動産銀行として前期中に創設せられた勸業銀行、農工銀行及び動産銀行として設立せられた興業銀行も、各其分野に業務を擴張し、其他北海道拓殖銀行、臺灣銀行及び朝鮮銀行等が顯著なる發達を遂ぐるに至つたのである。第五篇は總括であつて、本邦銀行發達の總括的觀察についての叙述である。

以上の如く、過去五十年間は我國銀行制度の最も波瀾曲折に富んだ時代であつて、之が正確なる全局展望の智見を攝取することは頗る困難で、斯學に志し斯業に執る者の常に憾とした所であるが、著者は克く正確なる資料と精細なる統計とに依つて、此の起伏重疊せる銀行發達の歴史について、明確なる叙述を試みたばかりでなく、更に之に添綴するに産業の發展史を以てした點は、特に本書の價值を高めた所以である、即ち本書を編く者は、過去五十年間に於ける我國の銀行制度が如何にして發達し、又如何なる點に於いて歐米諸國のそれと異なり、如何なる處に缺點が存在するか、又銀行業そのものが如何にして發達し、銀行の職分が如何にして重要な度合を増進し、その内

部の機關が如何なる分化的進展をなしつつあるかについて精細なる知識を得ると同時に、他面に於て、一國銀行業の發達は其國産業の發展と聯進應行すべきものであつて、銀行の運用する過去資本の蓄積は産業の發達を助長し促進すると共に、資本の發達に由つて更にその大を加ふる所以を闡明し得るの利益がある。

只本書は華を歐洲大戰勃發前に留めたがために、開戦から今日に至る迄の約六年間に亘る我銀行業發達の最も顯著なる又最も興味多き時代の叙述を缺いて居る事と、今一つは全文が殆んど平面的描寫であつて論斷的部分に乏しい點は名玉の微瑕とも謂ひ得るが、然し是は著者もその序文に於て他日の添補を約して居るやうであるから、一般讀書子と共に其完璧の日を鶴首して待つこととする。

要するに此種の研究は極めて變々たるもので、先きにしては東洋經濟新報社の編纂にかゝる明治金融史と、瀧澤直七氏の日本金融史論あるのみで、今石澤氏の此書を得たのは、涸渇せる我學田に取つて洵に慶賀すべきことと信ずる、想ふに、將來に於て明治維新以來の銀行業并に産業發達の歴史を調査せんとする者は、必ずや本書を以て座右に缺ぐべからざる参考書とするであらう、是れ本書結核の概要を紹介して之を江湖に推奨する所以である。(菊判、六二〇頁、定價五圓八拾錢、同文館發行)